
ゴールデンウィーク

葵 凜香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「ゴールデンウィーク」

【Zコード】
Z2420

【作者名】
葵 凜香

【あらすじ】

せつかくの「ゴールデンウィーク」なのに初日は失恋した紗也。恋人の伸之は「紗也の事がわからない」と言つ。

弥生祐さん主催の『5分企画』参加作品です。

『5分企画』で検索をするとたくさんの作者様の作品が待っています。

美味しいプリンを三つも買って帰った。巷でも人気のとろける食感のプリンだ。

口の中で甘味が広がりとろとろでも食べやすくて、一つ皿をペロリと平らげ、一つ皿の蓋を開ける。単純な事だけどこれはこれで結構幸せな事だと思う。でも三つ皿に差し掛かりスプーンがプリンに刺さつたまま掬えなくなつた。もう無理、気持ちが悪い。込み上げる吐き気をビールで流し込み息をつくと皿からはぼろぼろと涙が零れた。

今年は「ゴールデンウイークに土日が繋がり、私は五日間の連休をもらつ事が出来た。

初日の夜、恋人の伸之のマンションを訪ねた。彼は昼間からやつているであろう仕事が片付いていないらしくリビングのテーブルに資料を広げて黙々と書類を作っていた。久しぶりに遊びに来た私としては面白くないけど……仕事だから仕方がないと思い夕食を準備してから、また出直すわね、と彼に告げた。

「なんで帰るの？」

伸之は打つていたパソコンに手を乗せたまま傍らに立つ私を見上げ不機嫌そうに口を開いた。

「仕事してるし、邪魔になるでしょう」

「邪魔になるくらいなら最初から呼ばないし」

伸之は大きく息を吐き、またキーボードを叩き始めた。

かなりイライラしてるわね。その様子に私もため息をついた。

「とつあえず今日は出直すから、仕事が片付いたら連絡してね」

「うせまだ休みは四日間もあるんだからゆっくりできる時にゆつ
くじ過いさせばいい。私はそう思い帰る事にした。でも背を向けるの
と同時に彼に手首を強く掴まれた。

「じゃあ来なくともいいけど」

「え？」

伸之のメガネ越しの目があまりに冷たく睨むから私は返答に詰ま
つてしまつた。

「来なくていいって言った。紗也が何を考えてるのかわからんないし」

「わかんないって……邪魔したくないってそれだけじゃない」

「わかったよ、邪魔だ邪魔。もう一度と来なくていいよ」

痛いくらいに掴まれていた手首の束縛は解かれ、伸之は黒髪を搔
いてからまたパソコンに向き直る。

「一一度とつて……別れるつて事？」

熱くなつた手首をなぞりながら問い合わせたけど伸之は何も答えて
はくれなかつた。

予期せぬ展開に私は思考がついて行かなくて、あまり深刻に考え
られないままマンションを後にした。家路の途中で美味しいと評判
のプリンを見つけてこんな時くらい贅沢してやううと張り切つて三
つも買って帰つた。

クッショングで声を殺しながらひとしきり泣いたらプリンの気持ち悪さは幾分収まっていた。大好きだけどもう当分プリンはいいや。缶に残っていたビールを一気に飲み干してから、せりこむつ一本開けて一気飲みした。

ああ、もう。なんで私はフラれたのよ？ 伸の方方がよっぽど何を考えているかわからないじゃないの。

ビールじゃ全然酔えない。私は調理用のワインと日本酒を持ち出して各自を注いだグラスを失恋乾杯、と鳴らして一気にあおった。このむやんぽんはさすがに効いた。

心地よくなつて来て私はまとめていた髪を解き、ベットに倒れ込みながら考えを巡らせる。

「いろいろと気を使つたつもりなんだけどな……」

起き上がりて日本酒をもう一杯注ぎ、ひょひょと苦しげながらも飲み込んでからクッショングを抱いた。

「伸のお荷物にはなりたくないのよー」

都合のいい彼女になりたい訳じゃないけど、物わかりのいい彼女にはなりたかった。

伸の仕事が忙しいのもわかっているつもりだからむやみに彼と約束をすることはない。そう言えば彼の家に私の私物つてあまり置いてきて無いな。

「後腐れなんて何も無いなんてー あははは……」

ああしていたら、これをしていれば……そんなことをこりこり浮

かべではまた涙が溢れる。いくら後悔したって終わつた恋には何の役にも立たないのに。

それからの三日間、私は部屋にこもつて過ごした。起きて、ぼんやりして、飲んで泣いて眠る。でも三日も経つとそんな生活にも飽きた。

連休最終日、早朝に田を覚ました私は鏡の中にバケモノにため息をついた。瞼も顔全体もむくみが酷い。おまけに目も鼻も真っ赤だ。明日からはまた仕事が始まりいつもの日常に戻る。どうにかしないと。

田を冷やすためのタオルを水に浸したところで田課だつたジョギングを三日間サボつていたことに気づいた。よし、まず走りに行こう。私は髪を一本に結びウエアに着替えた。

三日間とここん落ち込んだ。伸之にたくさん腹も立てた。でもまだ好き。だからまだ辛い。

でも私は信じている。これから先もきっと素敵な人生が待つている。どんなに絶望したつてまた素敵な事があるはず。そのためにまたたくさん傷つこうけど。

そして必ずまた恋をする。私は愛する人の腕の中がどんなにあたたかいかを知つているから。

素敵な事が恋や愛で無くても、私はまた走り出すんだ。

靴紐を強く縛つてからキャップを深めに被り深呼吸をひとつ。鍵を開けて勢いよくドアを開いた。

「あつ」

ドアの外に思いがけず伸びがいた。座り込んでいた彼も驚きながら

ら立ち上がりバツが悪い様子でお尻を叩いた。

「紗也、その……『ごめん』

私は顔を伏せたまま彼の顔を見れずにいた。なんでいるの？ そう思つても驚きで言葉は出なかつた。

「俺はただ紗也にそばにいて欲しかつたから。……仕事が片付かないハッ当たりでの態度は無いな。『ごめん』

伸之の言葉にぼんやり見つめていた地面が滲んで行く。

「気使つてくれてているのはわかつているのに、紗也は俺といるのがつまらないんじゃないのかつて、そんな事を思つていたんだ」

私はそんな事無いとばかりに首を振つた。
ずつと上げられなかつた顔を合わせると、むくみ放題の私の顔を見て伸之は軽く吹き出した。

「ちょっと見ない内にえらい顔に……」

「酷い言ごうね。誰のせいと思つてるの

伸之は「めん」めん、と笑いながら謝り、地べたに置いていたビニール袋を拾い上げた。

「セー」のコンビニで紗也の好きそうなプリン買って来たから機嫌直して

「プリン……じゃあ半分ちょうどい」

私は苦笑しながら伸之を部屋に招き入れた。

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございます。

5月5日 5時55分投稿

これに全力を注いだ感はあります(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2420/>

ゴールデンウィーク

2010年10月10日21時26分発行